

位置と環境

馬場地下式横穴墓群は、町の中心部から北に約2 km離れた宮崎県えびの市との県境付近で北側に緩やかに傾斜する標高223m付近の鶴丸台地北端部に広がる。

本町は、地下式横穴墓とともに地下式板石積石室墓（永山古墳群）があり、2つの墓制が見られる地域である。

調査の経緯

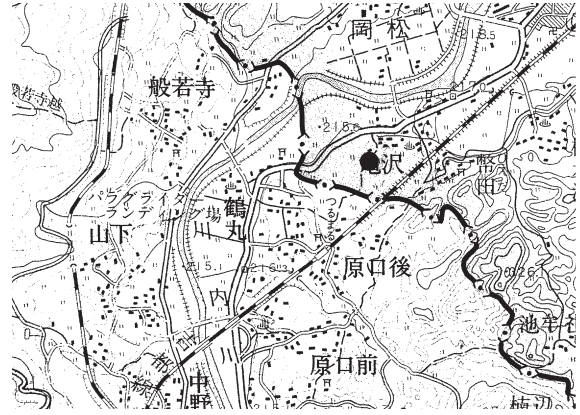
本地下式横穴墓群は、平成2年5月29日、宅地造成地の土取り中、削平壁面に開放した空洞内に2体の人骨が露呈し、発見されたものである。

玄室が開放されたため、同年6月11日から6月14日にかけて緊急発掘調査が行われた。調査は、吉松町教育委員会が主体となり、県教育委員会の協力を得て実施した。

調査は、玄室が開放した地下式横穴墓の記録保存のための調査と後方台地上にも同様の地下式横穴墓の存在が予想されたため、竪壙と閉鎖石を検出しその有無を知る確認調査が行われた。

調査の結果、同台地上には、8基の地下式横穴墓が所在していることが確認された（第2図）。

なお、8基の地下式横穴墓の呼称は玄室が開放したものを1号墓と称し、発見順に2号から8号の号名



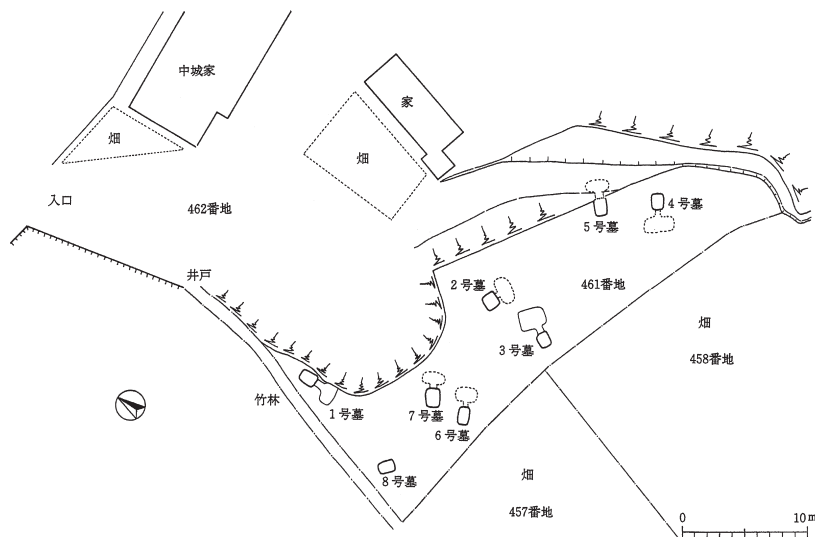
第1図 馬場地下式横穴墓群の位置

がつけられている。また、3号墓は天井が陥没していることが確認されたため玄室のみ記録保存のための調査が行われた。

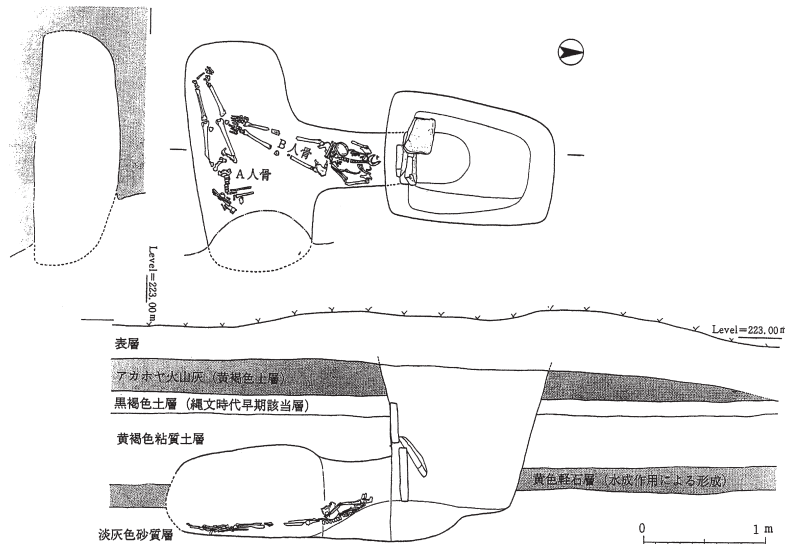
遺構と遺物

1号墓（第3図）の構造についてみると、竪壙の平面形は、南北140cm×東西100cmで長方形を呈し、玄室は竪壙の短辺方向に位置する。羨道入り口の羨門は3枚の板石で塞がれ、うち2枚の石は若干粗雑に2次的に設置された状況が確認された。玄室は、いわゆる「平入りドーム形玄室」と呼ばれるもので、平面プランは隅丸長方形、天井はドーム状を呈しており、羨道が玄室平面形の長辺に付く。

次に、埋葬されていた人骨についてみると、一体（A人骨）は、玄室長軸に並行した南側奥に東西に伸展葬の形で整然と埋葬されている。頭部は造成で削平された部分にあたり、残存していない。もう一



第2図 馬場地下式横穴墓分布図



第3図 馬場地下式横穴墓1号墓実測図

体（B人骨）は、頭部は羨道内の閉鎖石の近くに、足元はA人骨の膝あたりに位置する伸展葬である。頭部は埋葬後の地震などの影響により骨盤付近まで転落している。B人骨は閉鎖石が2次的に置かれている点と人骨の出土状況から追葬されたものと思われる。また、A人骨の北側に埋葬可能なスペースがあるにもかかわらず、このような位置に雑然と埋葬されており、追葬時の奇異な状況が確認された。

人骨は鹿児島大学歯学部調査によりA・B人骨とも壮年女性という結果が得られている。

遺物は、A人骨の左手にイモガイ製の貝輪（第4図1）が装着された状態で発見された。貝輪は、幅1.2cm、直径6.5cm、厚さ1.1～0.4cmのものである。

玄室のみ調査が行われた3号墓も同じく2体の人骨が発見され一体は追葬が確認された。A人骨は壮年女性、B人骨は若年女性と推定されている。

遺物はB人骨の頭部付近に副葬品として刀子状の鉄器（第4図2）が出土している。

特徴

本地下式横穴墓の閉鎖装置は、いずれも羨道入口に置かれていることが確認された。隣町の栗野町北方地下式横穴墓の構造と同様で、この地域で普及した手法と思われ、地下式横穴墓の西限に位置する大口地方の竖壙上面に閉鎖石をかぶせる手法とは異なり、地域差が見られるものである。

玄室の調査は、1号墓と3号墓のみであったが、い

ずれも追葬が行われており、追葬時期は人骨の検出状況から時間的な経過が考えられることから地下式横穴墓にも何らかの墓標が所在していたことが想定される。

本地下式横穴墓からは貝輪が出土しているが、本県の地下式横穴墓からの貝輪の出土は肝属郡高山町上ノ原9号墓、同横間9号墓、大口市瀬ノ上9号墓からの出土が知られているのみで報告例が極めて少なく貴重な発見である。

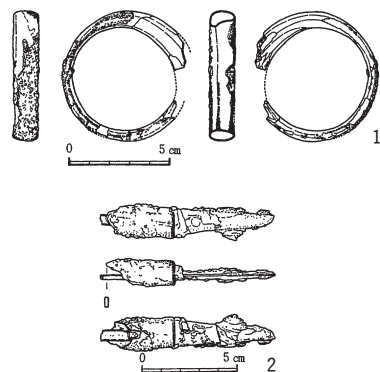
資料の所在

出土した人骨ならびに副葬品は、吉松町教育委員会に保管されている。

参考文献

吉松町教育委員会1991「馬場地下式横穴墓群」『吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書』（2）

（藤井義則）



第4図 馬場地下式横穴墓出土の副葬品